

## 教養プロジェクト（小説）

01150024 佐々木詢平

### 侏儒の言葉 芥川龍之介

短編小説の羅生門や鼻、河童、などが有名である芥川がそれらの小説とは趣向を変え、著した箴言集。1923年から27年まで月刊誌の「文芸春秋」に連載されていた。人間社会に対する鋭く辛辣な分析が短い文章の中で表現されている。タイトルにある侏儒とは知識のない人或いは背の低い人への、蔑称である。19世紀に活躍したジャーナリスト兼作家であったアンブローズ・ビアスの「悪魔の辞典」の影響を受けていると言われている。両者の違いは侏儒の言葉が単なる短い節を連ねているのに対し、「悪魔の辞典」はそのタイトルの通り辞書の形式をとり、一つ一つの言葉に風刺を込めた定義を与えている点である。

### 坂の上の雲 司馬遼太郎

司馬遼太郎の代表作の一つ。明治日本を秋山好古、真之兄弟と正岡子規の伊予出身の3人から捉え、まさに坂の上の列強という雲を追いかける日本の姿を描き出している。明るい明治、暗い大正、昭和に代表される所謂、司馬史観が如実に現れており、この作品がベストセラーとなったことから日本人の歴史観に少なからず影響を及ぼしていると言えるかもしれない。序盤は、3人を中心に物語が進むが、後半はほとんど日露戦争史というような様相を呈して、3人はほとんど登場しなくなってくる。司馬本人は、「フィクションを禁じて書くことにした」と述べているが、内容に誤りがあると指摘する研究者もいる。この作品はNHKで2009年から2011年にかけてドラマ化され、それで知名度を飛躍的に高めたが、司馬本人は戦争賛美の作品と解釈される恐れがあるため、ドラマ化には前向きではなかったらしい。この作品を記念して、3人の故郷の愛媛県松山市には坂の上の雲ミュージアムという博物館が設立されている。

### 銀の匙 中勘助

中勘助が書いた自伝的な小説。一つ一つの話が大体独立しているため、あらすじというものはなかなか簡単に言えないが、その一つ一つの話俯瞰すると、銀の匙を引き出しから見つけたことをきっかけに、伯母の限りない愛情に包まれて育った少年時代を回想するという話である。この本のすごい所は、単に子供の頃の体験を描いていることではなく、子供として、子供の立場で感じたことを描いていることである。大人になっても、子供の頃のことを覚えている人は多いだろうが、その記憶を子供の立場のまま覚えている人は少ないと思う。また、この本の中には、明治時代の日本人の、特に子供の日常の様子をよく伝えているので、後世の人間にとっては、とても興味深いものであるともいえる。なお、この本は1992年の

「読書の達人が選ぶ岩波文庫の100冊」の一冊に選ばれており、2003年の「私の好きな岩波文庫100」にもランクインしており、幅広い層に人気であることがわかる。

## 空知川の岸辺 国木田独歩

明治の文豪、国木田独歩の作品の一つ。独歩というと、「武蔵野」という作品が教科書の文学史の欄に載っているため有名だが、今回は敢えて北海道を舞台としている作品を選んだ。独歩が妻と共に北海道移住を計画するにあたって、土地の撰定にひとり北海道へ行った経験から書かれている。作品の中で、独歩は札幌から歌志内、それから空知太、現在の砂川市空知太へ行き、最終的に空知川の岸を目指している。自然の冷厳さであるとか、開発初期の北海道に移住した人々の人間模様を描いている。作品の結びにもあるが、結局独歩の北海道移住の計画は頓挫した。原因は生活が貧しいのに妻の佐々城信子が耐えられず、両親の元に帰ってしまい、その後失踪の末協議離婚となったからである。元々、両者の結婚は独歩が一方的に迫り、信子を独歩との結婚に反対している佐々城家から勘当させて、無理やり成立させたものであり、結婚当初からひどくいびつな関係であった。この一連の顛末をモデルに小説としたのが有島武郎の「或る女」である。

## 生まれ出ざる悩み 有島武郎

主人公である「僕」が札幌に住んでいる頃に出会った絵描きになることを夢見ている少年「君」の生活や苦悩を、共感を持って描いている。作品中、「君」は画家になりたいが、故郷の岩内で貧しく暮らしている父や兄のためにその夢を抑え、家業の漁師に甘んじざるを得ないという現実の厳しさに直面しており、その切なさが主題ではないだろうかと思った。この作品の重要人物である「君」にはモデルがいる。それが木田金次郎というまさに岩内出身の画家である。作者の有島武郎は東京出身だが、北大の前身である札幌農学校の卒業生であり、北大の校歌である「永遠の幸」は有島武郎がアメリカの南北戦争の時期に北軍が歌っていた「Tramp! Tramp! Tramp!」を日本語の歌詞に変えたものである。

## 変身 カフカ フランツ

カフカの作品の中では、最も知られている作品である。原題は「Die Verwandlung」。ある日起きると、巨大な虫になっていた青年グレゴールとその家族の顛末が語られている。最終的には、父親に投げられたリンゴで負った傷もあり、徐々に衰弱していき、世話をしてくれていた妹がグレゴールを見捨てるべきと主張し、家族から見放される。グレゴールも「自分は消えてなくなるべきだ」と考え、息絶える。その後、残った家族は元の家から引越し、彼らがこれからの幸せな生活に思いはせる場面で作品が終わる。この虫に変身したグレゴールを現代の知的障害者や認知症の親などと置き換えることも或いはできるかもしれないが、カフカはこの作品が暗いと理解されることも社会風刺と理解されることも嫌った。この作品も小説を離れ、映画化を過去4回されている。村上春樹はこの作品を基礎に「恋するザム

ザ」という短編小説を書いた。因みに、仮面ライダーにおいて、主人公の人間がヒーローに姿を変えることを変身と呼ぶことはこの作品に由来しているらしい。

## 地獄の季節 ランボー

象徴主義を代表する詩人ランボーが27歳で記した詩集。象徴主義とは、自然主義への反動から発生した、現実を忠実に表現するのではなく、理想的、観念的に世界を探求する運動のことである。ランボーは37歳の若さで、癌で夭折した為、作品はとても少なく、他には「イリュミナシオン（飾画）」、「酔いどれ船」くらいしか主だった作品がない。ランボーはしばしば「早熟の天才」と呼ばれるが、16歳にして第一級の詩を作っていたというから、驚きである。私が読んだ岩波文庫版は評論家の小林秀雄の翻訳であり、小林自身、帝大在学中の23歳で「地獄の季節」に出会ってから、20代はかなりランボーに傾倒した。作中、「そら、科学だ。どいつもこいつもまた飛びついた。肉体の為にも魂の為にも、—— 医学もあれば哲学もある、—— たかが万病の妙薬と恰好をつけた俗謡さ。それに王子様等の慰みかそれとも御法度の戯れか、やれ地理学、やれ天文学、機械学、化学・・・・

科学。新貴族。進歩。世界は進む。何故逆戻りはいけないのだろう。これが大衆の夢である。

俺達の行く手は『聖霊』だ。俺の言葉は神託だ、嘘も偽りもない。

俺には解っている、ただ、解らせようにも外道の言葉しか知らないのだ。ああ、喋るまい。」

と、第一次世界大戦後に崩壊していく近代的進歩主義に対し大戦前の19世紀にすでに反発の意を表明していたことは特筆に値するだろう。ただ、特に詩については、その詩が書かれた言語で読まないとその詩の情感は正確につかみとれないように思った。

## 月と6ペンス モーム

サマセット・モームの代表作である。この作者のほかの作品では、「人間の絆」が知られている。芸術の魔力に突如取り憑かれた男ストリックランドの徹底したエゴイズムを描いている。このストリックランドのモデルが、後期印象派で、「我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか」や「タヒチの女」で知られているポール・ゴーギャンであることは有名で、ゴーギャンというと、この作品を連想する人も少なくないという。私はこの作品を読んで、同じ画家であることや、芸術の為なら家族を見捨てるどころが、高校時代、古典の授業で扱った「宇治拾遺物語」の絵仏師良秀の話やそれをモチーフにした芥川の「地獄変」ととても似ているように感じた。ところで、モームは「世界の十大小説」というものを選んでおり、「高慢と偏見」や「白鯨」、「戦争と平和」などが10作品の中に入っている。一作を除いて全部、19世紀の作品であることは良いとしても、10作品全部欧米、横文字の作品であることには、少し寂しさを感じる。

## 蠅の王 ゴールディング

ウィリアム・ゴールディングの代表作である。むしろほかの作品を知らない人の方が多いだ

ろう。一応挙げておくと、「後継者たち」や「我が町 ぼくを呼ぶ声」などがある。作者がノーベル賞を受賞していることもあって、名前も代表作の「蠅の王」もよく知られている。作品の内容は、無人島に漂流した子供たちが、最初は自分たちで作った規則を守り、よくまとまった生活をしているのだが、次第に分裂し、一方のグループに内なる根源的な悪が目覚め、野蛮人同様の振る舞いをするようになり、ついには仲間も殺してしまうようなとてもショッキングな話である。タイトルの蠅の王は物語中盤に登場し、彼らの生活がうまくゆかない理由を語るという重要な役割を果たしている。似たような話で、ジュール・ヴェルヌの「十五少年漂流記」があるが、後者が、子供たちが力を合わせて生活している姿を描いているのに対して、前者は分裂の末殺人が起こるなど、圧倒的に陰鬱である。

## 不思議な少年 マーク・トウェイン

「トムソーヤの冒険」で知られるマーク・トウェインの作品である。原題は「The Mysterious Stranger」である。マーク・トウェインは他のアメリカ人作家から高い評価を受けており、「響きと怒り」や「サンクチュアリ」で知られるウィリアム・フォークナーは彼が「最初の真のアメリカ人作家であり、我々の全ては彼の相続人である」と評した。内容はマーク・トウェインが晩年に陥った人間不信と徹底的なペシミズム、つまり悲観主義を前面に押し出したものとなっており、オーストリアの小さな村に突然現れたサタンを名乗る少年が、その村で事件が起こるたびに人間を嘲るというあらすじである。例えば、サタンは「人間ってやつは、ただくだらないけちな感情と、これも愚劣でけちな虚栄心と生意気さと野心を持ってる、ただそれだけなんだ。笑って、溜息をついて、そして死んで消えちゃう、馬鹿げた、くだらない一生にしかすぎないんだからね。」と言い、また「とにかく、たいした進歩だよね。(中略)だが、現在のこの文明以外には、まだ大量殺人のうまい方法を発明したというのは、一つとしてなかったわけだよね。もちろん人類最大の野心というのは人間を殺すことであり、現に人間の歴史はまず殺人をもってはじまっているわけだしーそれぞれみんな懸命の努力はしてきたさ。」など、人間というもののあらゆる性質をこき下ろしている。「トムソーヤの冒険」の楽天的な感じからは、とても同じ人が書いた作品とは思えないくらい悲観的である。